

## (論文内容の要旨)

本論文は、フランス語の定名詞句の意味論を、名詞句の指示対象の唯一性に焦点を当てて論じたものである。Russell 以来、定名詞句の単数形 (ex. the president) は唯一存在する対象を表すという唯一性説が提唱される一方、We arrived at *the bank of a river*. のように、唯一性条件を満たさない例も多数報告されてきた。本論文は、定名詞句の唯一性条件を正しいものと認めた上で、その条件を満たさない用例を統一的に説明することを試みている。

序論では、本論文で扱う定名詞句を定冠詞付き名詞句の単数形 (ex. l'hôpital 「病院」) に限ることを述べ、論文の構成の概略を示している。

第一章では、定名詞句の指示を説明するために過去に提案された説を、唯一性説・親近性説・前提調整説の三つに分け、親近性説と前提調整説には問題があることを指摘し、唯一性説を採用する根拠を示している。また唯一性説にも、指示説・同定可能説・存在前提説の三つの亜種があるとして、このなかでは存在前提説が最も有効であることを論じている。さらに名詞句の指示を統一的に説明するための理論的モデルとして、Fauconnier のメンタル・スペース理論、坂原(1996)、東郷(1999)らの心的モデルに基づき、知識データベース領域・発話状況領域・言語文脈領域から成る談話モデルの概要を提示した。このモデルに基づいて、定名詞句の単数形は談話モデルを構成するいずれかの領域に唯一の存在前提を持つ指示対象を表すとの仮説を提示した。

第二章では、先行文脈に先行詞がない *Elle est allée acheter du pain à la boulangerie*. 「彼女はパンを買いにパン屋に行った」のようなタイプの用法を論じている。従来、このタイプの用法は、町にパン屋が一軒しかないことを意味しないため、唯一性条件に対する反例と見なされてきた。しかし本論文では、このタイプの定名詞句は現実世界において外延を指すのではなく、メンタル・スペース理論でいう役割 (role) を表すという Epstein (1999) の説を採用し、その上で定名詞句の役割解釈にとっての認知フレームの重要性を広汎に論じている。認知フレームとは、「クリスマス」と言えば「樅の木」「サンタクロース」「クリスマスケーキ」などの連想が働くように、概念を束ねる知識ネットワークをいう。この章では、フランス語と英語の実例を詳細に分析し、役割解釈は認知フレームに支えられて成立すること、認知フレームは固定的ではなく可変的であり、発話意図に応じて柔軟に呼び出されることを示し、定名詞句が認知フレームにおける唯一の役割を表すとするので、従来反例とされてきたこのタイプの用法においても、唯一性条件が成り立つことを明らかにした。

第三章では、*la fille d'un paysan* 「農民の娘」のような属格を伴う定名詞句を取り上げている。従来の研究では、属格の名詞句が不定名詞句のときには唯一性条件が成り立たないとされてきた。本章では、まず名詞を他の名詞との関係の有無を基準として、本質的關係名詞 (ex. *la fille* 「娘」)、偶然的關係名詞 (ex. *le film* 「映画」)、非關係名詞 (ex. *l'ordinateur* 「コンピュータ」) の三つに分

類し、本質的關係名詞では属格名詞が定めるときでも、主要部名詞の表す物の数が少数で、かつその個性が関与的でないときは役割解釈ができるが、属格名詞が偶然的關係名詞や非關係名詞のときは、属格名詞が不定でないとは役割解釈できないことを明らかにした。役割解釈は第二章で扱った用例と同じく認知フレームに依拠しており、唯一性条件は守られるとしている。

第四章では、いわゆる直示的用法を取り上げている。定名詞句には *Ferme la porte*。「ドアを閉めて」のように発話現場にある物をさす直示的用法があるとされてきた。しかし本章ではこの用法は直示ではないとし、Kaplan が提唱する命題の真偽が判定される場としての *circumstance of evaluation* を土台に意味解釈のフレームという概念を提案した。このフレームは時間 *t* と場所 *p* というパラメータに束縛された談話領域に、認知フレームもしくは話し手の知覚領域が重ね合わされたものと定義される。*Le train arrive!*「列車が来た！」では、「駅で列車に乗る」という認知フレームが、*L'évier déborde!*「流しが溢れてる！」では知覚領域が意味解釈に関与しており、定名詞句はこのように定義された解釈フレームにおける唯一の対象を表すと結論している。

第五章では、定名詞句の照応的用法のうち、同じ名詞句で受け直す忠実照応を取り上げた。不定名詞句 *un garçon*「ある男の子」を同一名詞を用いた定名詞句 *le garçon*「その男の子」で照応する忠実照応は、単純な現象に見えるにもかかわらず複雑な問題を提起することが知られている。本章では Corblin (1983)、春木(1986)、井元(1989)などの先行研究が、一見すると互いに矛盾する説を提示しているという問題点を詳細に検討し、時間 *t* と場所 *p* というパラメータに束縛された談話領域における事物や出来事の関係が構成するネットワークから成る解釈領域を提案し、先行詞である不定名詞句の指示対象が、十分に構築されたネットワークの中に定位されていれば忠実照応が可能であると考えることにより、先行研究の矛盾点を解消できることを示した。

結論では第一章から第五章までの分析をまとめた上で、従来の研究ではもっぱら定名詞句の指示対象の性質に焦点が当てられていたが、定名詞句の意味解釈においては、文脈によって限定された談話領域や認知フレーム・知覚領域といった、解釈を支える場が本質的な重要性を持つことを強調している。

## (論文審査の結果の要旨)

本論文は、フランス語の定名詞句の意味論を、名詞句の指示対象の唯一性に焦点を当てて論じたものである。名詞句の指示理論は分析哲学における主要なテーマであるが、言語学の意味論においても今なお活発な議論が展開されている。イオタ演算子を提案した Russell の研究以来、定名詞句の単数形 (ex. *the president*) は唯一存在する対象を表すという唯一性説が有力な仮説とされてきたが、その一方で *We arrived at the bank of a river.* のように、唯一性条件を満たさない例も存在することから、唯一性を定名詞句の意味素性と認めない研究者も多い。本論文は、定名詞句の唯一性条件を正しいものと認めた上で、その条件の改良を試み、定名詞句の意味解釈には指示対象そのものよりも、解釈が行われる談話領域という場が重要であることを、フランス語と英語の豊富な実例の分析によって明らかにした意欲的な論文である。

従来の研究においては、複雑な様相を見せる定名詞句の指示を説明するために、唯一性説以外にも Heim らの親近性(*familiarity*)説、Lewis らの前提調整説などが提案されてきた。本論文では、親近性説と前提調整説には理論的問題があることを指摘した上で、定名詞句は対象を指示するのではなく、その存在前提を聞き手に伝達するという立場を採っている。この点は第四章で扱ったいわゆる直示的用法を分析する際にきわめて重要な点である。本論文は、定名詞句は対象の存在前提を聞き手に伝えるという立場から、先行詞を受ける照応的用法・属格を伴う用法・いわゆる直示的用法・先行詞のない用法のすべてを、一貫した原理で説明できることを明らかにした点が高く評価できる。指示が話し手の一方的な操作ではなく、話し手と聞き手の共同行為としての談話的現象であることが、豊富な言語データに基づいて示されている点が、従来の研究と本論文の大きな違いであると言えよう。

本論文が定名詞句の意味解釈が行われる場として提案しているのは、大きく分けて、概念レベルで成立する認知フレーム、話し手の視覚や聴覚などの知覚領域、そして時間と場所に束縛された意味解釈のフレームの三つである。まず第二章で扱った *Elle est morte à l'hôpital.* 「彼女は病院で亡くなった」の *l'hôpital* 「病院」は、外延世界において唯一の病院をさすのではなく、認知フレームにおける役割を表すという分析は、Epstein (1999) がすでに提示したものであり、それ自体は新しいものではない。しかし従来の研究では、病院などの施設は「町フレーム」における役割とされてきたが、それでは解釈の困難な例がある。本論文では、話し手が診察や治療に来たときは *Je suis à l'hôpital.* 「私は病院にいる」だが、工事に来たときは *Je suis dans un hôpital.* 「私は病院にいる」のように、定と不定の交替現象が観察されるなどの多数の例に基づき、認知フレームが従来考えられていたような固定的なものではなく、発話意図に応じて呼び出される可変的なものであることを明らかにしており、当該の言語現象の理解を一層深めている。

意味解釈の場としての知覚領域は、**Le verre est tombé!**「グラスが落ちた」のように、出来事に気づいた瞬間に発話される現象文において働くと考えられている。この用法は従来は直示的用法と見なされて来たが、なぜ定冠詞が用いられるかの明快な説明は困難であった。本論文では、このタイプの定名詞句は話し手と聞き手が共有する知覚領域における存在前提を伝達し、ときに聞き手に前提の調節を促すとの仮説を提示した。この考え方は従来の研究にはない観点を含んでおり、現象文には二種類のサブタイプを認めるべきであるという副次的な主張とともに、注目に値する考察となっている。

いわゆる忠実照応のパラドックスを説明するために提案されている時間と場所に束縛された意味解釈のフレームは、**Kaplan** の **circumstance of evaluation** を、命題の真偽が判定される局所的な場という本来の分析哲学の定義を越えて、より言語分析に適した形式に書き改めたものである。この考え方によれば、先行詞を受ける照応的用法においても、照応的に用いられた定名詞句は先行詞の指示対象を直接にさすのではなく、先行文脈が構築した意味解釈のフレームにおいて間接的に対象の存在前提を伝達するということになる。本論文が提示した分析は、**Corblin**、**Kleiber**、春木、井元らの先行研究が互いに矛盾する主張をしているようにも見える錯綜した状況を整理し、その上で妥当な解決策を提案している点が評価できる。

本論文ではいわゆる連想照応の問題は扱っていないが、それ以外の、先行詞のない用法・属格を伴う用法・直示的用法・前方照応的用法を、英語とフランス語の豊富な言語データに基づいて詳細かつ広汎に考察し、定名詞句の意味解釈においては指示対象自体ではなく、定名詞句が解釈される談話領域が重要であることをきわめて説得的に示しており、定名詞句の指示に関する研究を前進させるものとして高く評価できる。よって本論文は、人間・環境学専攻 環境情報認知論講座の博士論文として十分な内容を持つものと認める。

また平成21年9月24日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。